

## パラウク・ワ語における類似並列表現の構造

山 田 敦 士

(日本学術振興会／北海道大学)

### The structures of parallel expressions in Parauk Wa

YAMADA, Atsushi

Japan Society for the Promotion of Science / Hokkaido University

In Parauk Wa, many parallel expressions can be found in the morphological and syntactic domains. This article aims to analyze the word and phrase structures of these expressions, especially according to the following features:

- (1) Symmetry of number of syllables
- (2) Symmetry of syntactic and semantic features
- (3) Order of elements

The results of analysis indicated that the formation of the parallel phrase is less restricted by the features mentioned above than that of the parallel word. We also found that the words and phrases of these expressions were strongly related to each other.

キーワード：パラウク・ワ語，類似並列表現，語，句，押韻

Keywords: Parauk Wa, parallel expressions, word, phrase, rhyme

1. はじめに
2. 類似並列法とは
3. 語と句の区別
4. 類似並列語の特徴
5. 類似並列句の特徴
6. 随伴的形式
7. 類似並列語と類似並列句の平行的事例
8. まとめ

#### 1. はじめに

中国雲南省西南部からビルマ（ミャンマー）のシャン州にかけて分布するパラウク・ワ語（モン・クメール系）は，強い単音節性を示す孤立型の言語である<sup>1</sup>。かつて豊かな接辞法や重複法が存在したものの，それらはすでに生産性を失い，

---

<sup>1</sup> 基本語順はVS(O)で，主要部－従属部という修飾関係を示す。表記については稿末の一覧を参照されたい。

化石化している。共時的には、複合法のみが生産的な形態的手法という状況にある（山田2008:28-36）。

このような言語内部の事情もあり、周ほか(1984)や趙ほか(1998)などの先行研究においては、統語論に比して、形態論に格別の注意が払われてこなかった。例えば、複合語と句が明確に区別されず、両者の記述（例を含む）にも重複がみられるといった事実からもその意識の一端を垣間見ることができる。著者自身は、比重のおき方は別としても、両者はしっかりと区別されるべきものであり、また区別するだけの意義があると考えている。しかし、山田(2008)では、記述文法という性質上、この問題について十分に議論することができなかった。そこで本稿では、「類似並列法」という形態論と統語論の両領域で分析の対象となる表現手法を題材に、パラウク・ワ語の語と句という言語単位の関係、またその構造化の異同について問い直してみたい。

## 2. 類似並列法とは

パラウク・ワ語には、対称的な二つの要素を、要素間の関係を表わす標識を介在させずに並べるという表現方法がある。このような表現方法を「類似並列法」、その表現された形式を「類似並列表現」と呼ぶことにする<sup>2</sup>。同様の現象は東・東南アジアの諸言語において、広く観察される<sup>3</sup>。

パラウク・ワ語の類似並列法は、語の形成、句の形成、文の形成など様々なレベルにおいて実現される<sup>4</sup>。以下に語、句、節それぞれのレベルにおける実現例を挙げる。並列されている要素は{ }で示すこととする。

- (1)    haukhuan        (< {hauk} + {huan} )  
       発展する            上る            膨らむ
- (2)    sivai    {lih        ju}        {hauk    blaun}  
       虎        下る        下り坂    上る        上り  
       「虎はうろうろした。」
- (3)    {muan    nu        ha?}        {muan    ka?        to}  
       弄ぶ        火        熱い        弄ぶ        魚        走る  
       「火で遊べば火傷をし、魚で遊べば逃げられる。」

(1)から(3)では、実現レベルこそ違うものの、いずれも音節数や文法性といった点において対称的な要素（それぞれ前部、後部と呼ぶ）が並列されていることがみとれる。

類似並列表現は、並列された要素それぞれが別個に解釈されるのではなく、二つの要素の総和として解釈されるという意味的特徴をもつ。例えば、(2)の句表現

<sup>2</sup> 本稿で扱う類似並列表現の一部（特に句レベルでの実現例）について、ワ諸語における先行研究においては、「四字格」（趙ほか1998）や「四音格詞」（趙2006）などして、主に修辭的側面を中心に研究されてきた。類似並列という文法現象自体に着目した記述に山田（2007:266-267, 2008:254-262）がある。

<sup>3</sup> 周辺言語における同様の現象を扱ったものに、Haas（1964：タイ語）、龔（1992：徳宏タイ語）、戴ほか（1995：ジンポー語）、Matisoff（1973：ラフ語）、加藤（2004, 2005：ポー・カレン語）などがある。

<sup>4</sup> 修辭的効果をもたらすことも多く、語りの文脈、かきこまった文脈の中において多く観察される。

は、「坂を下り、坂を上る」という字義通りの動作の連続と解釈されるのではない。むしろ、上り下りを繰り返す、その一連の様子を表すと解釈される。このような意味的特徴の裏返しとして、並列された要素の個別性（特定性）を上げるような操作をおこなうと、一つのまとまりのある単位として認められなくなる事実がある。

- (4)    sivai    {lih    ju    ?in}    {hauk    blaun    ?an}  
          虎        下る    下り坂   これ    上る    上り坂   あれ  
          「虎はこの下り坂を下り、あの上り坂を上った。」

(4)は統語的には等価とみなされる要素同士であるものの、まとまりのある一つの事態とは認識されず、「この下り坂を下り、あの上り坂を上る」という単なる事実の羅列であると解釈されてしまう。

以下では、類似並列表現において想定される対称性（音節数の対称性、統語的・意味的対称性）および要素の配列順に注目しつつ、語と句それぞれのレベルにおける類似並列法の構造化について記述・分析をおこなうことにする。

### 3. 語と句の区別

形態標示をおこなわない、いわゆる孤立語的性格の強いパラウク・ワ語においては、純粋に形態論的観点から、語と句を区別することができない。また、弁別特徴としての語アクセントをもたないため、音韻的にこれを判別することも困難である。例えば、休止により規定される多音節の音韻領域であれば、どのような統語単位であれ、同じような卓立（強さ）を観察することができる。以下、音節を単位とする相対的な強さ・弱さをそれぞれ●、○と表す。

- (5)    pau??ac    (○●)            「兄弟」  
 (6)    ŋe?sio?sio    (○○●)        「学校」  
 (7)    ruŋ        krak    (○●)  
          角        水牛  
          「水牛の角」  
 (8)    ruŋ        krak        yum    (○○●)  
          角        水牛        死ぬ  
          「死んだ水牛の角」  
 (9)    ruŋ        krak        yum        ki?    (○○○●)  
          角        水牛        死ぬ        3 複  
          「彼（女）たちの死んだ水牛の角」

(5)(6)は語であり、(7)から(9)は句である。いずれも最終音節に卓立が現れるため、音調パターンによって単位を同定することは不可能である。つまり、パラウク・ワ語における語と句の区別は、もっぱら統語的観点（一部構成要素のみに統語操作が可能か否か）からなされるということになる。本稿で扱う語例、句例はいず

れもこのような観点から、言語単位の認定を受けたものである。

ところで、本稿で対象とする類似並列表現をめぐっては、上述の音韻領域の認定によって、それが類似並列構造をもつ語（以下、類似並列語）なのか類似並列構造をもつ句（以下、類似並列句）なのかを判断することが可能である。

- (10) haukhuan (○●) (< {hauk} + {huan} )  
 発展する 上る 膨らむ
- (11) {lih} {ju} {hauk} {blauŋ} (○●○●)  
 下る 下り坂 上る 上り坂  
 「うろうろする。」

(10)のような類似並列語では、卓立が唯一の音韻領域の末尾に現れる。一方、(11)のような類似並列句においては、並列要素間に若干の音声的休止が観察されるため、全体として二つの音韻領域が認められる。このように、休止と卓立に基づく音韻領域の認定によって、類似並列語と類似並列句を区別することが可能である。

#### 4. 類似並列語の特徴

これまでに収集されている類似並列語は、いずれも偶数個の音節からなるものである。二音節のものが圧倒的に多いが、二音節語の拡張形などとして四音節のものも確認されている。その内部構成は、名詞（代名詞を含む）同士あるいは動詞同士による結合であり、いずれも構成素の品詞性をそのまま引き継ぐかたちで語形成がなされてる。以下、それぞれの実例を示すとともに、語形成にかかわる諸特徴について述べる。

##### 4.1 二音節からなる語

二音節の類似並列語には、次のようなものがある。

- (12) ta?yɛ? (< {ta?} + {yɛ?})  
 祖父母 祖父 祖母
- (13) khau??o? (< {khau?} + {?o?})  
 樹木 木 竹
- (14) lɪcso? (< {lɪc} + {so?})  
 (身近な) 家畜 豚 犬
- (15) kau?hak (< {kau?} + {hak})  
 体躯 身体 皮
- (16) lau?luɲ (< {lau?} + {luɲ})  
 損壊する 壊れる 焦げる
- (17) tintan (< {tin} + {tan})  
 あちらこちら こちら あちら
- (18) ?in?an (< {?in} + {?an})  
 あれこれ これ あれ

- |      |                |                            |
|------|----------------|----------------------------|
| (19) | makauŋ<br>田畑   | (< {ma} + {kauŋ})<br>焼畑 水田 |
| (20) | lɛʔbɬauŋ<br>風雨 | (< {lɛʔ} + {bɬauŋ})<br>雨 風 |
| (21) | plaiʔuɸ<br>酒食  | (< {plai} + {ʔuɸ})<br>酒 飯  |
| (22) | taiʔcauŋ<br>手足 | (< {taiʔ} + {cauŋ})<br>手 脚 |

このうち(12)から(18)は、要素の配列順が固定的である。一方、(19)から(22)については、要素を逆に配列することも不可能ではないようである。

- |      |                |                            |
|------|----------------|----------------------------|
| (23) | kauŋma<br>田畑   | (< {kauŋ} + {ma})<br>水田 焼畑 |
| (24) | bɬauŋlɛʔ<br>風雨 | (< {bɬauŋ} + {lɛʔ})<br>風 雨 |
| (25) | ʔuɸplai<br>酒食  | (< {ʔuɸ} + {plai})<br>飯 酒  |
| (26) | cauŋtaiʔ<br>手足 | (< {cauŋ} + {taiʔ})<br>脚 手 |

要素の配列を決定する要因、また固定化する要因については、今のところ不明である。

#### 4.2 四音節からなる語

四音節からなる類似並列語について、例えば、次のようなものが認められる。

- |      |                       |                                       |
|------|-----------------------|---------------------------------------|
| (27) | sigritsigra<br>「バッタ類」 | (< {sigrit} + {sigra})<br>コオロギ キリギリス  |
| (28) | yaŋyetyaŋyai<br>「セミ類」 | (< {yaŋyet} + {yaŋyai})<br>セミの一種 ヒグラシ |
| (29) | taʔyɛʔmɛʔkuɸ<br>「年長者」 | (< {taʔyɛʔ} + {mɛʔkuɸ})<br>祖父母 父母     |
| (30) | bruŋlɔmɔikrak<br>「役畜」 | (< {bruŋlɔ} + {mɔikrak})<br>運搬畜 耕畜    |

(27)(28)は、多音節単純語を並列させた例であり、要素の配列順は固定的である。(29)(30)は、前節で述べた二音節からなるもの同士を連結したものである<sup>5</sup>。(29)では第二要素である yɛʔ と第三要素である mɛʔ が韻母の特徴を共有しており、要素の配列順も固定的である。一方、(30)では、押韻特徴をもたないためか、次のよう

<sup>5</sup> 二音節の類似並列語から拡張されたものについて、中間に休止を入れることも可能である。この場合、二つの音韻領域をもつ類似並列句と解釈される（山田2008:257）。

に配列順を入れ替えることも可能である。

- (31) mɔ̌ikrakbruŋlɔ̌  
「役畜」

#### 4.3 類似並列語のまとめ

本節の主な論点をまとめておく。

- 類似並列語は偶数の音節数からなり、前部と後部で対称的な構成となっている。
- 類似並列法が語のレベルで実現された場合、その配列は固定的であることが多い。しかし、配列が流動的なものも一部存在する。

### 5. 類似並列句の特徴

これまでに収集されている類似並列句は、いずれも四音節以上からなるものである。その内部構成をみると、いずれも名詞性の句同士、動詞性の句同士による結合事例である。形成された類似並列句においても、類似並列語の場合と同様、構成素の品詞性がそのまま引き継がれているという特徴がみてとれる。以下、それぞれの事例を示すとともに句形成にかかわる諸特徴について述べる。

#### 5.1 四音節からなる句

四音節からなる句は、その内部構成から、それぞれ別々の構成素であるタイプ（以下、ABCD タイプ）と 1 要素目と 3 要素目と同じ構成素であるタイプ（ABAC タイプ）の二つに分類することができる。

##### 5.1.1 ABCDタイプ

このタイプの類似並列句には、BとCが韻母の特徴を共有するものとそうでないものがある。

- (32) {loʔ      kraɪ}      {lɑi      pɔt}  
話      話す      文字      書く  
「話し言葉、書き言葉」
- (33) {pɔt      bɔŋ}      {phɔŋ      ɲɛʔ}  
折れる      梯子      碎ける      家  
「滅亡する」
- (34) {paʊh      ʔia}      {cia      plai}  
殺す      鶏      醸造する      酒  
「(客人を) もてなす」
- (35) {lih      ju}      {hauk      blaun}  
下る      下り坂      上る      上り坂  
「うろうろする」

- (36) {mo? kap} {lɪh kre}  
 隠す 頭 出す 尻  
 「頭隠して尻隠さず」

(32)(33)は、BとCの間で韻母の特徴を共有している。(34)についても、超分節素こそ異なるものの、分節素の種類・並び自体は同じである。このような押韻特徴をもつものは並列要素の配列順が固定的である。これに対し、押韻特徴をもたない(35)(36)については、次のようにAB句とCD句の順序を入れ替えることが可能である。

- (37) {hauk blaʊŋ} {lɪh juː}  
 上る 上り坂 下る 下り坂  
 「うろうろする」
- (38) {lɪh kre} {mo? kap}  
 出す 尻 隠す 頭  
 「頭隠して尻隠さず」

### 5.1.2 ABACタイプ

このタイプの類似並列句は、前部後部それぞれの句内の主要部形式を同じくするものである。

- (39) {dau? ɲɛ?} {dau? yaʊŋ}  
 中 家 中 村  
 「村落中」
- (40) {pa paŋ} {pa luŋ}  
 もの 白い もの 黒い  
 「白いもの、黒いもの」
- (41) {loi ɲai?} {loi bo}  
 三 日 三 晩  
 「三日三晩」
- (42) {paʊh ʔia} {paʊh so?}  
 殺す 鶏 殺す 犬  
 「動物を供犠する（直訳：犬やら鶏やらを殺す）」
- (43) {phai tai?} {phai caʊŋ}  
 速い 手 速い 足  
 「動作が機敏である」

(39)から(43)のAB句とAC句の配列順は、基本的に自由である。

### 5.2 六音節以上からなる句

六音節以上からなる句として、例えば、次のようなものが認められる。

- (44) ʔai {cot rəmɲai} {cai rəmmuih}  
 (人名) 落ちる 涙 むせる 鼻水  
 「アイは心が塞がった。(直訳：涙が流れ、鼻水にむせる)」
- (45) ɲɛʔ ʔan {hauh kənbun} {hun kənsimeʔ}  
 家 あれ 多い 女子 多い 男子  
 「あの家は子孫が多い。(直訳：女の子が多く、男の子も多い)」

片側が三音節以上の類似並列句においては、(45)のように、前部と後部における音節数が一致しない例も珍しくない。これは、並列される要素が長くなるほど、形式にかかわる制約が緩くなることを示していると思われる<sup>6</sup>。

### 5.3 「破格」的な用法

類似並列句において、後部に現れる語が、その語本来の統語的・意味的特徴から外れるかたちで用いられる場合がある。

- (46) kiʔ {pauh mɔi} {nɔi krak}  
 3 複 殺す コブ牛 横になる 水牛  
 「彼らは耕畜を供犠した。」
- (47) kiʔ pauh mɔi  
 3 複 殺す コブ牛  
 「彼らはコブ牛を殺した。」
- (48) \*kiʔ nɔi krak  
 3 複 横になる 水牛
- (49) ʔai {tɪn kauʔ} {tɪn hak}  
 (人名) 大きい 身体 大きい 皮  
 「アイは体格がいい。」
- (50) ʔai tɪn kauʔ (< kauʔ ʔai tɪn )  
 (人名) 大きい 身体 身体 (人名) 大きい  
 「アイは身体が大きい。」 「アイの身体は大きい。」
- (51) \*ʔai tɪn hak (< \*hak ʔai tɪn  
 (人名) 大きい 皮 皮 (人名) 大きい  
 「??アイは皮が大きい。」 「??アイの皮は大きい。」

(46)でpauhと対になるものとして用いられているnɔiについて、本来は「横になる」の意味の一項自動詞である。ここではmɔi「コブ牛」との押韻を重視して臨時的に用いられていると考えられる。(49)のtɪnは二項自動詞である。(50)(51)に示すように、kauʔ「身体」はその項として適格であるのに対し、hak「皮」は意味的に不適格である。このような組み合わせが用いられる理由については、7節で述べる。

<sup>6</sup> 並列要素がより長い、以下のような類似並列節においては、音節数に加えて、極性などの句自体の統語的・意味的性質の違いまでも許容する。

{rhaŋ	kian	ciʔ	viak}	{dak	ʔon	ʔaŋ	ciʔ	lauʔ}
歯	硬い	できる	虫歯	舌	柔かい	(否)	できる	壊れる

「柔よく剛を制す。(直訳：硬い歯は虫歯になり、柔かい舌はダメにならない)」



## 5.4 類似並列句のまとめ

本節の主な論点をまとめておく。

- 並列要素が長い場合，音節数の対称性が崩されることもある。
- 要素の配列順は，押韻現象のあるものを除き，基本的に自由である。
- 統語的・意味的に「破格」的な用法事例もみられる。

## 6. 随伴的形式

類似並列表現のなかに，前部要素が自由形態，後部要素が拘束形態であるような例が少なからずみられる。この拘束形態を随伴的形式と呼ぶことにする<sup>7</sup>。

- (52)    ?ɣ?        {gau?    rhɔm}    {gau?    rhi}  
          1 単        喜ぶ     心        喜ぶ     ?  
          「私は嬉しかった。」
- (53)    rhɔm        ?ɣ?  
          心        1 単  
          「私の心」
- (54)    \*rhi        ?ɣ?  
          ?        1 単

随伴的形式は，決まった自由形態との間で類似並列のペアを形成するのみで，単独で用いられることはない（以下，グロスを（随）とする）。その性質によって，三つに分類しておく。

### 6.1 音節特徴を共有するもの

このタイプは，音節の特徴を一部共有するかたちで用いられるものである。これまでに収集されているものは，いずれも音節頭子音を共有するものである。

- (55)    lauhlg                    (< {lauh} + {lg})  
          「よい」                    よい                    (随)
- (56)    vhacvhuc                (< {vhac} + {vhuc})  
          「真っ暗な」                暗い                    (随)
- (57)    {tɔŋ        prɛ?}    {tɔŋ        prum}  
          鍋        食物        鍋        (随)  
          「食物を入れる鍋」
- (58)    {pa        mhɔm}    {pa        mhiam}  
          もの        美しい    もの        (随)  
          「良いもの」

(55)(56)は類似並列語の例，(57)(58)は類似並列句の例である。

<sup>7</sup> クメール語学においては「随伴語」と呼ばれている（坂本1988:1489）。

## 6.2 外来の成分であるもの

二つ目に、随伴的形式が外来成分であるものである。

- (59) pɔttiam (< {pɔt} 「書く」, {tiam} 「(随) (< 徳宏ダイ語: tɛm<sup>31</sup> 書く)」  
「書く」
- (60) brɛʔlak (< {brɛʔ} 「盗む」, {lak} 「(随) (< 徳宏ダイ語: lak<sup>31</sup> 盗む)」  
「盗む」
- (61) {lai pɔt} {lai tiam}  
文字 書く 文字 (随)  
「(書いた) 文字」
- (62) {pui brɛʔ} {pui lak}  
人間 盗む 人間 (随)  
「泥棒」
- (63) {klau loʔ} {chan kɔ} (chan kɔ < 漢語: ‘唱歌’ 歌を歌う)  
合唱する 話 (随) (随)  
「歌を歌う」

(59)(60)は類似並列語の例, (61)から(63)は類似並列句の例である。この外来成分の随伴要素について、興味深い特徴を2点指摘しておきたい。一つは、類似並列句で用いられる外来成分は、類似並列語の中で必ずしも用いることができないという点である。例えば、(63)から類推される klauchan (「歌う」) や loʔkɔ (「話」) などという類似並列語は、実際に存在しない。逆に、(59)(61)の tiam や(60)(62)の lak にみられるように、類似並列語内で用いられる外来成分は、類似並列句の要素としても用いることが可能である。もう一つは、類似並列句には、単独で用いられない (つまり純粋な借用語とはいえない) 様々な外来成分が頻繁に現れることである。資料的な制約からあくまで仮説の域を出ないが、以上2点から、類似並列句の方が外来成分の受け入れに対する間口が広い可能性が指摘される。

## 6.3 それ以外のもの

このタイプは、押韻特徴ももたず、外来成分でもないものである。

- (64) hiadɔŋ (< {hia} + {dɔŋ})  
「蜜蜂」 蜜蜂 (随)
- (65) {pian rhan} {pian bran}  
上 歯 上 (随)  
「歯の上」

(64)は類似並列語の例, (65)は類似並列句の例である。このタイプの形式は、もともとは自由形態であったものが無意味化した結果である可能性がある。

## 6.4 随伴的形式のまとめ

本節の主な論点をまとめておく。

- ## 7. 類似並列語と類似並列句の平行的事例

(66) licso? (< {lic} + {so?})  
「(身近な) 家畜」 豚 犬

(67) {kən lic} {kən so?}  
子 豚 子 犬  
「動物の子 (「人間の子」 に対する言い方)

(68) prɛ?pruɯm (< {prɛ?} + {pruɯm})  
「食物」 食物 (随)

(69) {koi prɛ?} {koi pruɯm}  
ある 食物 ある (随)  
「食べ物がある」

確かに、パラウク・ワ語の類似並列表現についても、ポー・カレン語の場合と同様、対応する複合語の存在しないペアが句要素として用いられる点を指摘することができる。

- <sup>8</sup> 後部が従属部であるがゆえに、類似並列という形式を整えるだけの存在として、その語が本来もつ統語的・意味的特徴が変質した「破格」的な用法（5.3節）がなされることが考えられる。

(71) \*ʔihʔun

(72) {klau loʔ} {chan ko} (=例 63)  
 合唱する 話 (随) (随) (chan ko < 漢語: ‘唱歌’ 歌を歌う)  
 「歌を歌う」

(73) \*klauchan

(74) \*loʔko

(71)や(73)(74)のような語が存在しない以上、語構造を中心に据えた「分解」という考え方を完全に採用するわけではないはいかない。

しかし一方で、相互に完全に独立した現象とみなすには不都合な事例もある。例えば5.3節において、類似並列句の後部が「破格」的な用法である以下のような事例の存在を指摘した。

(75) ʔai {tɪn kauʔ} {tɪn hak} (=例 49)  
 (人名) 大きい 身体 大きい 皮  
 「アイは体格がいい。」

(76) ʔai tɪn kauʔ (< kauʔ ʔai tɪn ) (=例 50)  
 (人名) 大きい 身体 身体 (人名) 大きい  
 「アイは身体が大きい。」 「アイの身体は大きい。」

(77) \*ʔai tɪn hak (< \*hak ʔai tɪn ) (=例 51)  
 (人名) 大きい 皮 皮 (人名) 大きい  
 「??アイは皮が大きい。」 「??アイの皮は大きい。」

(77)の動詞tɪnとhakの組み合わせは、意味的に許容されない。それにもかかわらずこのような要素の選択がなされるのは、kauʔhak「体軀」(例15)という類似並列語(固定配列)が念頭にあるからと考えざるを得ない。この問題に関する解釈・記述法については、用例の拡充をおこなうとともに、稿を改めて論じたい。

## 8. まとめ

本稿では、パラウク・ワ語の類似並列表現をめぐって、語と句という異なるレベルにおける構造化の異同を考察してきた。これまでの議論をまとめておく。

	類似並列語	類似並列句
音節数の 対称性	対称性あり	対称性あり 但し並列要素が長いと、非対称 的になる場合もあり
統語的・意味的 対称性	対称性あり 一部に随伴的形式の 使用事例	対称性あり 随伴的形式、臨時的な外来成分 を多用。「破格」的な用法事例 もあり
要素の 配列順	固定配列が優勢 一部に自由配列	基本的に自由配列 押韻現象や随伴的形式がある 場合、固定配列

上表から、類似並列語と類似並列句には、構造的な類似性・連続性が確認される。しかし、全体的に、類似並列句形成の場合の方が類似並列語形成の場合よりも構造化に関わる制約が緩やかであり、システムを逸脱するかような事例が多いこともみてとれる。つまり、形態的手法に乏しいパラウク・ワ語においても、形態レベルと統語レベルを区別して記述する意義があるといえる。

一方で、類似並列語と類似並列句の構成素に関する平行的事例の存在（7節）や外来成分が類似並列句を間口にしている可能性（6.2節）などは、類似並列表現をめぐって、語構造と句構造が双方向にリンクを張っている事実を示唆するものである。この問題については、様々な角度からさらなる考察が必要である。今後はまず、類似並列法と同様、異なるレベルにおいて実現される「同格法」などについて、その構造化の異同を解明することが課題となる。それらの議論を総合して、パラウク・ワ語、ひいては孤立的言語における形態論と統語論の関係性について、考察を深めていかなければならない。

## 略号

- 1, 2, 3 .....人称（それぞれ1人称, 2人称, 3人称）  
 (人名) .....人物の名前  
 (随) .....随伴的形式  
 (単) .....単数  
 (複) .....複数  
 (否) .....否定標識

## 転写に用いる記号

パラウク・ワ語は以下に示す音素によって表記する。

{子音音素}

p, ph, b, bh [mpfi~bfɪ], t, th, d, dh, c, ch, j, jh, k, kh, g, gh, ʔ,  
 m, mh [ɱm~mfɪ], n, nh, ɲ, ɲh, ŋ, ŋh, s, h, v, vh, y, yh, r, rh, l, lh

{母音音素}

i, u, e, ɛ, ɔ, o, ɐ, a, ɔ

{超分節素}

高音域音節（無標：ka），低音域音節（下線：ka）

## 本研究のデータ

本研究に用いたデータは、すべて筆者自身の現地調査によって得られたものである。調査は、中国雲南省滄源県および昆明市にておこなった。調査に協力していただいた方々に、この場を借りて感謝の意を表したい。

なお、データの収集に関わる現地調査及びデータの解析は、日本学術振興会科研費補助金（特別研究員奨励費）「北方モン・クメール諸言語の記述的・動態的研究」（平成 20-22 年度，研究代表者：山田敦士）および同補助金（基盤研究 B）「言語・文化調査に基づくイラワジ・サルウィン流域諸民族の歴史の解明」（平成 21-22 年度，研究代表者：新谷忠彦）による研究活動の一環としておこなわれた。

## 参 考 文 献

- Chao, Yuan Ren. 1968. *A Grammar of Spoken Chinese*. Barkley and Los Angeles: University of California Press.
- 戴庆厦・徐悉艰 [Dai, QingXia・Xu, XiJian]. 1995. 『景颇语词汇学』. 北京: 中央民族大学出版社
- 龚锦文 [Gong, JinWen]. 1992. 「德宏傣语四音格词的结构形式及其特点」. 『民族语文』第2期. pp. 51-59.
- Haas, Mary R. 1964. *Thai-English student's dictionary*. Stanford: Stanford University Press
- 加藤昌彦. 2004. 『ポー・カレン語文法』. 東京大学博士論文.
- 加藤昌彦. 2005. 「ポー・カレン語の対句法(parallelism)」. 中山俊秀・塩原朝子（編）『記述研究から明らかにする文法の諸問題』. pp.145-159. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- Matisoff, James. A 1973. *The Grammar of Lahu*. Barkley and Los Angeles: University of California Press.
- 坂本恭章. 1988. 「クメール語」. 『言語学大辞典』1. pp.1479-1505. 東京: 三省堂.
- 山田敦士. 2007. 「パラウク・ワ語」. 中山俊秀・山越康裕（編）『文法を描く：フィールドワークに基づく諸言語の文法スケッチ』2. pp.259-284. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- Yamada, Atsushi. 2007. *Parauk Wa Folktales — 佤族巴饶克的民间故事 —*. Tokyo: Research Institute for Languages and Culture of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.
- 山田敦士. 2008. 『パラウク・ワ語記述文法』. 北海道大学博士論文.
- 赵岩社 [Zhao, YanShe]. 2006. 『佤语概论』. 昆明: 云南大学出版社
- 赵岩社・赵福和 [Zhao, YanShe・Zhao, FuHe]. 1998. 『佤语语法』. 昆明: 云南民族出版社
- 周植志・颜其香 [Zhou, ZhiZhi・Yan, QiXiang]. 1984. 『佤语简志』. 北京: 民族出版社